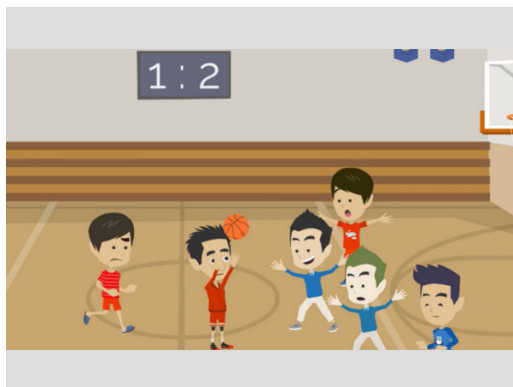


2025年度 研究成果報告書

所属機関名	三幸学園 東京未来大学
申請者氏名	大橋 恵
分担者氏名	藤後悦子、井梅由美子
研究課題名	ジュニアスポーツにおける応援席ハラスメントに対する保護者の認識



動画の例 試合中の判断ミス（ミニバス）



動画の例 応援席からの否定的反応（ミニバス）

【研究の概要】

本研究は、地域スポーツにおける保護者の応援席での言動がどのようにハラスメントとして認知されるのかを明らかにし、応援席ハラスメント防止に向けた基礎資料を得ることを目的として行われた。先行研究・質的調査を基に、サッカー、野球、バスケットボール、ダンスを題材とした応援席場面のアニメーション動画を作成し、これを用いたオンライン調査を行った。

研究1では、成人296名を対象に探索的因子分析を実施した結果、応援席ハラスメントの認知は「指示的介入」「傍観者の受動行動」「事後的・評価的批判」「社会的排斥」の4側面から構成されることが明らかとなった。続く研究2では、保護者741名を対象として、これら4側面の認知と性別や子どもの地域スポーツ経験との関連を検討した。その結果、性別や地域スポーツ経験によってハラスメント認知が異なることが示されるとともに、不適切な言動を目撃しながら何も行動しない「傍観者の受動行動」が独立した認知次元として抽出された。

本研究は、応援席ハラスメントを多面的な構成概念として整理した数少ない研究であり、保護者向け啓発や研修プログラムの基盤となる知見を提供した。

【研究の内容及び成果の詳細】

1. 研究内容及び成果（本研究によって得られた新知見、成果等）

本研究では、子どもの地域スポーツ活動における保護者の応援席での言動に着目し、どのような行動がハラスメントとして認知されるのか、応援席ハラスメントの認知構造と関連要因を明らかにすることを目的としていた。これまで保護者による過度な指示や叱責などの問題行動は指摘されてきたが、どのような応援席での言動がハラスメントとして認知されるのかを体系的に検討した研究は海外を含めほとんどなかった。

まず、先行する質的調査を基に、サッカー、野球、バスケットボール、ダンスなどを題材とした応援席場面を描いた30秒ほどのアニメーション動画を複数作成した。動画は専門家による内容確認と大学生25名を対象とした予備調査を経て修正し、できる限り自然なあり得る状況を描いた内容とした。

研究1では、日本人成人296名（男性149名、女性147名、平均年齢45.79歳）を対象に動画を提示し、その動画中に登場する保護者33名の行動についてハラスメントだと感じる程度を評価させた。探索的因子分析の結果、応援席ハラスメントの認知は4因子から構成されることが明らかとなった。第1因子の「指示的介入（Directive Interference）」は、試合中に子どものプレーへ過度に口出ししたり、自律的な判断を妨げたりする言動であり、保護者の善意による助言であっても心理的圧力として認知される可能性が示された。第2因子の「傍観者的受動行動（Passive Bystander Behavior）」は、不適切な言動を目撃しながら周囲の保護者が何も対応しない行動である。本研究で得られた最も重要な知見の一つであり、人々は加害行為そのものだけでなく、周囲の大人がそれにどう反応するかについても評価していることが示された。第3因子の「事後的・評価的批判（Retrospective/Evaluative Criticism）」は、試合終了後に子どものプレーや判断を振り返って否定的に評価する言動であり、振り返りや助言を意図した発言であっても、繰り返されることで心理的負担となる可能性が示唆された。第4因子の「社会的排斥（Social Exclusion）」は、挨拶を返さない、意図的に無視するなど、子どもを集団から排除するような関係的行動であり、応援席ハラスメントには直接的な暴言だけでなく、非言語的・関係的な行動も含まれることが明らかとなった。

研究2では、小・中学生の子どもを持つ日本人保護者717名（男性463名、女性254名、平均年齢46.46歳）を対象として、これら4因子と参加者属性との関連を検討した。その結果、女性は男性よりも「指示的介入」「事後的・評価的批判」「社会的排斥」をハラスメントとして認知しやすかった。また、子どもの地域スポーツ経験と参加者の性別との間には交互作用が認められ、女性では地域スポーツ経験が「指示的介入」の認知を、男性では「傍観者的受動行動」の認知を高めていた。一方、「社会的排斥」は、子どもに地域スポーツ経験がない保護者の方が高く評価していた。また、子どもが地域スポーツに参加した経験がある保護者には、このようなハラスメント行動を自分やチームの保護者達が行っているかどうか尋ねたため、応援席ハラスメントの実態についても分析する予定である。

以上の結果から、応援席ハラスメントの認知は単一ではなく、多面的な構造を持つことが明らかとなった。特に、周囲の大人が不適切な言動を傍観する行動が独立した認知次元として抽出されたことは、本研究の新たな知見である。本研究は、応援席における保護者の行動を多面的に整理した初めての研究として学術的意義を有するとともに、保護者向け研修やハラスメント防止プログラムを検討するための基礎資料となることが期待される。

2. 今後の研究の見通し

本研究では、応援席ハラスメントの認知が「指示的介入」「傍観者的受動行動」「事後的・評価的批判」「社会的排斥」の4側面から構成されることを明らかにした。今後は、まず、この4因子構造の妥当性を確認的因子分析などによりさらに検証するとともに、競技種目や子どもの年齢、競技レベルなどの要因によって認知構造が異なるかについて検討したい。

さらに、本研究では保護者による認知を対象としたが、ハラスメントの影響を最も直接的に受けるのは子どもである。そのため、子ども自身が同じ場面をどのように受け止めているのかを検討することも重要であろう。保護者が助言や応援と考える言動と、子どもが心理的負担として受け止める言動との差異を明らかにすることで、子どもの心理的安全性を高めるための具体的な支援方策につなげることができると考える。

加えて、本研究で得られた最も特徴的な知見である「傍観者的受動行動」について、その心理的メカニズムや介入方法を検討したい。周囲の保護者が不適切な言動を目撃した際、なぜ介入しないのか、また、どのような対応が子どもにとって望ましいと認識されるのかを明らかにすることは、応援席ハラスメント防止プログラムの開発に重要な知見を提供すると考えられる。

また、本研究は日本を対象として実施したが、応援席ハラスメントが日本特有の現象なのか、それとも海外にも同様の現象が存在するにもかかわらず十分に研究されていないのかは明らかではない。海外では指導者や保護者によるハラスメントに関する研究は蓄積されている一方、応援席ハラスメントそのものや、応援席における保護者同士の関係を扱った研究は極めて少ない。今後は、本研究で作成した動画や測定方法を活用し、海外の研究者との共同研究を通して国際比較を行い、文化による共通点および相違点を明らかにしたい。これにより、応援席ハラスメントの普遍的特徴と文化固有の特徴を整理し、保護者教育のあり方を検討するための基礎資料となることが期待されよう。

最後に、本研究で作成した動画刺激は、研究目的だけでなく、保護者や指導者を対象とした研修教材としても活用できるのではないかと考える。申請者らは、自治体やスポーツクラブなどで保護者や指導者を対象とした研修を行う機会もあるため、今後は本研究で作成した動画を研修教材として活用したい。動画を用いることにより、参加者にとってより具体的で理解しやすい研修になることが期待される。このように研究成果を実践へつなげていくことによって、地域スポーツにおける保護者の行動変容を促す一助となり、子どもがより安心してスポーツに参加できる環境づくりに貢献したいと考える。

3. 本年度の学会発表・論文、刊行物・著書名等（今後、発表等を予定しているものも含む。）

学会発表

1. 応援席ハラスメントの認知と類型化の試み：ジュニアスポーツの応援席にいる親の言動はどこからハラスメントと認識されるのか（日本心理学会、9月）

2. ジュニアスポーツにおける応援席ハラスメントの認識：地域スポーツ経験と性別、教育年数などによる違い（日本社会心理学会、9月）
3. 地域スポーツにおける応援席ハラスメントの実態：動画を用いた保護者対象調査（日本生涯スポーツ学会、11月）

学術論文

1. Recognition of Harassing Spectator Behaviors in Youth Sports: The Multidimensional Nature of Parents' Harassment Perception（学会発表1と2をまとめたもの、7月末に投稿）
2. 地域スポーツにおける応援席ハラスメントの実態：動画を用いた保護者対象調査（学会発表3，1月頃投稿予定）